

## 「隈庄飛行場と“世界のミフネ”」

9/25版

くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク 代表 高谷和生

### 1 はじめに ～戦後80年、昭和100年の諸相～

- 戦後世代としての「私の視点」～近現代考古学との出会い～
- 戦争遺跡保存全国ネットワーク全国運営委員、空襲・戦跡九州ネットワーク事務局長
- 熊本県内戦争遺産の調査・研究と啓発は、両輪の活動
- 活動そのものが「未来への継承」。戦後世代である高谷の「平和継承の活動」との位置づけ
- 戦争遺跡は歴史の遺産、忘れてはならない「歴史事実の厳粛なる構造」であり「モニュメント」
- さらに地域が戦争で失った貴重な人命、地域の自然や文化、そして地域が戦災のあと復興し生きてきた歴史を考えるうえからも、戦争遺跡の調査研究・保存活用は重要
- 戦争遺跡・遺産の学び・見学での「戦争の加害や被害の両面」 「東アジア史」視野からの歴史認識の重要性があり、時代背景や地域特性に関する基礎的な学びの保証が必要
- 近年、文化財活用論に圧され、全国では単に関心のハードルを下げる手法が多用されるが、誤用された昭和期の「満洲戦蹟保存運動の反省」を踏まえ、徹底した「戦争と平和の学び」の学習保証と、戦争遺産が「国民の共有財産・ヘリテージ」であるとの文化財認識が根底



写真1 1945年8月10日米軍機市街地空襲。AIと証言でカラー化

### 2 熊本の戦争遺跡・遺産

#### (1) 戦争遺跡とは

- 全国の戦争遺跡は「約50,000」件、指定登録は「390」件 ※2025年8月現在
- 熊本県内の太平洋戦争期の戦争遺跡総数は、多数の特殊地下壕を含めた「723件」
- 『くまもとの戦争遺産』内の一覧表記載、本会HP上には「249件」を精査し記載 ※2023年1月10日現在
- 熊本県内の指定登録文化財は国148件、県383件、市町村3,382件、国登録文化財156件の計2,382件

#### (2) 太平洋戦争期の指定 ※西南戦争期の指定等14件は除く

「花房飛行場給水塔」（陸軍菊池飛行場高架水槽・菊池市指定文化財）、「永山の掩体壕」（陸軍人吉秘匿飛行場木製有蓋掩体壕・球磨郡あさぎり町登録文化財建造物）の2件。また、その他、市町村で公有地化され、保護されている事例として次の2件がある。合志市が所有する「黒石原飛行場奉安殿」は、保存修復事業を予定しており、市域での軍施設をまとめて市指定文化財等を検討している。また、「東京第二陸軍造兵廠荒尾製造所変電所」は、荒尾市が所有・管理し逐次一般公開がなされている。また、戦争遺物である八代市「艦上爆機流星風防」、益城町「一〇式艦上戦闘機木製プロペラと奉納台」の指定の動きも見られる。※地域の歴史を語るうえで「重要な遺跡」との認識

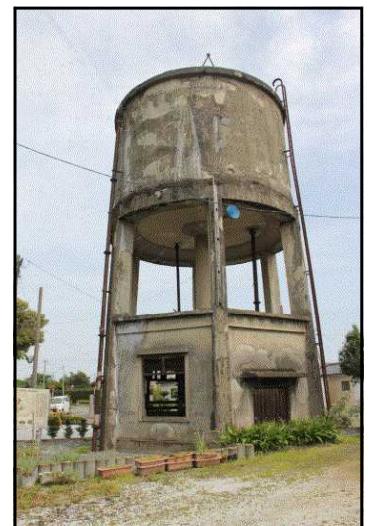


写真2 菊池市指定文化財「花房飛行場給水塔」菊池飛行場

#### (3) 熊本の「戦争の歴史」をたどる

##### ～熊本に残された戦争の傷跡「七大特徴」～

※『くまもとの戦争遺産ガイドマップ』、平和継承リーフレット『M76 焼夷弾と熊本空襲』・『松橋空襲』・『紙の爆弾 伝単』

- ①軍都熊本市の軍事施設  
～熊本城から東部の大江・渡鹿地区への軍施設の移転～
- ②九州で四番目に多い陸海軍飛行場  
～正規飛行場、本土決戦に向けての特攻秘匿飛行場～
- ③東京第二陸軍造兵廠荒尾製造所  
～軍直営で石炭を原料とした黄色火薬の生産～
- ④三菱重工業熊本航空機製作所と学校工場・地下工場  
～陸軍四式重爆撃機「飛龍」の生産～
- ⑤本土決戦に向けての天草地区砲台や震洋等の特攻艇基地、兵站基地としての人吉地区の飛行場・地下工場・地下壕群
- ⑥県内各地に残る空襲・戦災の「被害の歴史」
- ⑦朝鮮人や中国人、連合国軍俘虜労働者、敵機捕獲搭乗員への「加害の歴史」

### 3 限庄飛行場

※平和継承リーフレット『碧空に祈る 限庄飛行場』・『平成28年熊本地震被災』・『健軍飛行場』

#### (1) 大刀洗陸軍飛行学校限庄分教所・同教育隊

□熊本市南区城南町舞原に所在する。陸軍記録では「限之庄（くまのしょう）」とも記載。「舞原（まいのはら）飛行場」の別称もある。

□昭和14年頃から舞の原台地に造成を始め、昭和16年8月頃に完成する。当初は陸軍機の操縦生訓練のための教育隊飛行場「大刀洗陸軍飛行学校限庄分教所」として、菊池飛行場の同施設と同時に発足し、昭和18年6月には大刀洗陸軍飛行学校限庄教育隊と改称する。その間、将校学生、下士官学生（第八十六期戦闘操縦他）、少年飛行兵（第十期、十五期）、特別操縦見習士官（第三期）、特別幹部候補生（第一期）の約1,000名が巣立った。

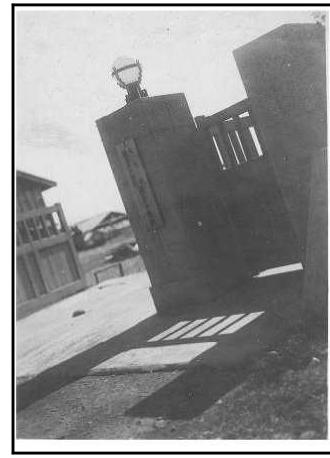


写真3 限庄飛行場の正門跡

写真4 基地正門と看板「陸軍大刀洗飛行学校限庄分教所」

写真5 陸軍限庄飛行場に初めて着陸する教育隊区隊長久我政喜さん乗機

写真6 待機所（エプロン）で暖気運転をする九九式高等練習機の列機

写真7 格納庫前で始動準備中の始動車と九九式高等練習機

くまもと戦争遺跡・文化遺産ナットワーク所蔵

#### (2) 飛行第110戦隊と沖縄攻撃

□戦況悪化に伴い教育隊は廃校となり鍛成教育に推移し、昭和20年4月、陸軍飛行第百十戦隊の配置が行われた。それまでに径45mの大型無蓋掩体壕25基造営と滑走路への幅50mの誘導路造成、部隊宿舎として飛行場南側縁辺部への教育隊兵舎を解体した材木を利用し三角兵舎建設、重爆機離着陸距離確保のための滑走路の2,500m延長等に取り組んだ。

□戦略爆撃隊である陸軍重爆撃隊は、浜松陸軍飛行学校を出身母体として、太平洋戦争当初は8箇戦隊が編成された。昭和19年第二独立飛行隊を母体とする本飛行第百十戦隊では、サイパン島アスリート基地攻撃により戦力を消耗し、新たな部隊として戦力回復を図った。その後本隊は昭和20年に入り、硫黄島への進出しての周辺攻撃、米軍上陸後は陸上攻撃の支援を行い、3月からは沖縄への航空総攻撃に参加した。

□昭和20年4月18日限庄飛行場に進出後は、沖縄に上陸した米軍機への各次の航空総攻撃を実施し、5月24日の義烈空挺隊による沖縄特攻作戦の義号作戦の支援も行った。8月13日、第百十飛行戦隊は健軍飛行場の第六十戦隊と合流し第百七十爆撃機隊を編成し、本土決戦に備えたが、健軍飛行場で終戦を迎えた。

#### (3) 沖縄特攻の中継基地として

□昭和20年7月、第三十戦闘飛行集団の配当飛行場となる。本飛行場は昭和20年3月から6月、沖縄に出撃する特攻機の中継基地として利用されてきた。

□大刀洗飛行学校の教官・助教で編成された「第三十・三十一・三十二振武隊」も当地を経由して特攻出撃した。また、本土決戦に向けて中間練習機による特攻隊「第九十九振武隊」も8月終戦時に逗留する。第一六二飛行場大隊が駐屯し、管理を行っていた。

□正門（くまもと南部広域病院正門）は消滅するが、院内「心字池」が、周辺には格納庫基礎4、コンクリート舗装の待機所（旧エプロン）、弾薬庫1、誘導路他が遺存している。

旧飛行場南側の熊本市火の君文化センター敷地に、平和の希求と鎮魂の慰靈碑「碧空（へきくう）に祈る」が、平成9年7月久我政基・牧勝美様他のご尽力で建立された。  
□本碑は平成28年熊本地震で倒壊し、背面には大きな傷が入るが、久我政基・徹氏ほか地元有志で復原された。



写真8 飛行場に遺棄された第一〇一戦隊第75番機 写真9 陸軍四式重爆撃機「飛龍」機上のソーレン氏とされる人物 衣川太一氏所蔵・くまもと南部広域病院提供 写真10 隈庄飛行場の平和の記念碑「碧空に祈る」

#### 4 世界の“ミネ”

##### (1) 三船敏郎の軌跡、出生から入隊、戦地をへて八日市飛行場へ

- 2016年11月米ハリウッドで殿堂入りした日本を代表する俳優故三船敏郎さんは、終戦を熊本市南区城南町舞原台地の陸軍隈庄飛行場で迎えた。
- 1920年（大正9年）、三船徳造の長男として、当時日本の占領下にあった中華民国・青島に生まれた。父・徳造は、秋田県鳥海町の出身の貿易商であり、写真業を営んでいた。家族はその後、満州国（当時）の大連に移り住んだ。大連中学を卒業後には、甲種合格で兵役に就いた。中国大陸で育ったことから、徴兵に際し死を覚悟し、父親の勧めで初めて日本の土を踏んだとされる。
- 写真の経験・知識があるということから満洲国・公主嶺の陸軍第七航空教育隊に配属され、満州各地を転戦し、空中写真を扱う司令部偵察機の偵察員となった。三船は晩年まで、カメラに対するこだわりが深かったという。
- その後は内地で、滋賀県八日市の「中部九八部隊・第八航空教育隊」に写真工手として配属され、1943年に同部隊に現役入隊した鷺巣富雄とは、その後生涯にわたる交友関係となった。鷺巣は三船の写真技術の高さを認め、円谷英二、大石郁雄と並んでの映画界の師と仰いでいる。1940年（昭和15年）、三船はこの「中部九八部隊」で、先輩兵である大山年治（東宝撮影所撮影部所属）から、「俺はこの3月に満期除隊となるが、来年はお前の番だ、満期になつたら俺の撮影所へ来い。撮影助手に使ってやる」と誘われた。しかし戦況が逼迫し、満期除隊は無くなり、以後敗戦まで6年間を「古参上等兵」のまま過ごすこととなった。
- 今回新たな三船演劇写真等を公開された、岡山市の故五十嵐啓之輔氏は、八日市飛行場で三船と同部隊員である。



写真11 第八航空教育隊（中部九八部隊）当時の三船敏郎さんの軍服姿 三船プロダクション提供

写真12 部隊の集合写真 写真13 九七式戦闘機の前の飛行服姿の三船敏郎 岡山市五十嵐俊輔氏提供

##### (2) 隈庄飛行場での三船敏郎と演劇

- 昭和20年4月隈庄飛行場では偵察員を離れ、「第一六二飛行場大隊」に配属され「気象班（班長は軍曹で約15人の組織）」に所属し、本部に詰めて、六航軍から送られる気象情報の分析・部隊への伝達等を行っていた。また他にも頼まれて、出撃前の特攻隊員の遺影を撮

る仕事にも従事していたという。ただ三船が撮ったとされる特攻隊員遺影は、現在までの所、確認されていない。8月15日、日本の敗戦を知った時、「ざまあみやがれ！」と言う気持ちだったという。

- 地元部隊員の証言から、銀幕デビュー前の当時の三船敏郎上等兵が、昭和20（1945）年6月24日、地域住民を招いた「隈庄飛行場部隊祭」にてエンカン服を着て、タクトをふり「にわか仕立て楽団を指揮する姿」が、当時被服班員の牛田隆雄氏により目撃されている。
- 平成27年10月17日、ご遺族三船史郎様から、演題は不明であるが「眼帯を付けた正面アップの演劇」時とされる写真が確認された。但し、撮影年月日及び撮影場所等の詳細は不明であった。三船が所属していた八日市飛行場に関する調査団体「東近江戦争遺跡を保存する会」中島伸男氏他に問合せを行い、本演劇写真に関する部隊祭・演劇披露の情報等が無かったことから、2017年熊本城南図書館で三船プロダクションに提供いただいた「眼帯姿の演劇写真」を「三船敏郎、隈庄飛行場の軌跡 II」展示会にて、公開・披露した。
- 戦後三船さんは隈庄を離れ、東宝第一期ニューフェイスとして銀幕にデビューする。「世界のミフネ」の戦後はここ熊本隈庄から始まった。

## 5 隈庄をめぐって

### （1）三船敏郎、新たな演劇写真

- 平成27年公開した三船敏郎さんの「眼帯を付けた正面アップの演劇」時写真に関する演劇写真二葉を含む6枚が、先述の五十嵐氏宅に残されていた。
- 写真は孫にあたる現所有者五十嵐俊輔氏がデジタル化して保管しており、2025年6月に確認された。但し詳細は父親からも聞いていないという。「三船敏郎演劇写真②」は「滋賀県八日市飛行場の舞台上での写真である。左から三人目の眼帯を付けた椅子に座る軍人が三船である。「三船敏郎演劇写真③」は、滋賀県八日市飛行場の出演者集合での演劇写真である。左から二人目の軍人姿でサーベルを持つ人物が三船である。
- その他では、「九七式戦闘機前での飛行服・飛行帽姿、部隊員集合、写真工手実習の様子、五十嵐氏と三船とのニショット」写真である。
- 五十嵐氏回顧録では、「初年兵で入隊した私達の面倒を良くみてくれた。意地悪な班長に睨まれない様に要領を教えてくれた。班長と大げんかしてタンカをきつたこともあった。上に 대해서は反骨精神旺盛だった」という。「ハンサムな空の神兵 三船敏郎上等兵」であった。



□写真14 三船敏郎の戦時演劇写真 三船プロダクション提供

□写真15 「中部九八部隊・第八航空教育隊」部隊での舞台上での演劇場面。三船は左から三人目の眼帯姿の軍人 岡山市五十嵐俊輔氏提供

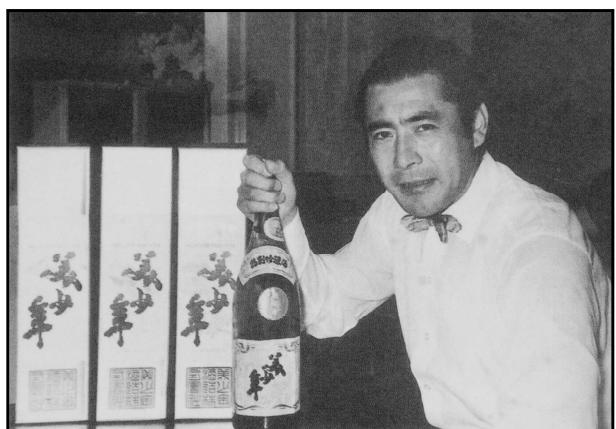


写真16 三船敏郎さん主演「用心棒」でのオフショット 写真17 ハリウッド殿堂入り 星マークと長男史郎さん  
三船プロダクション提供 写真18 “世界のミフネ”と銘酒「美少年」 美少年酒造記念誌より

## (2) 戦後の隈庄飛行場とオキュパイド写真

- 2023年、隈庄飛行場での米軍接収状況の解明する、プライベートカラースライドが発見された。
- 本オキュパイドジャパン写真の掲載書は、佐藤洋一・衣川太一著『占領期 カラー写真を読む～オキュパイド・ジャパンの色』2023岩波新書
- 「陸軍隈庄飛行場での戦後接収カラースライド写真」は、全8枚で「隈庄飛行場全景・接収を待つ陸軍飛行機群・飛龍機上のソーレン氏・接収前の疾風・隈庄町警防団・焼却処分される陸軍機」他である。
- 撮影者は「ヘンリー・H・ソウレン」氏であり、カラースライドも同氏所蔵品であったが、衣川太一氏が購入・収集されたものである。米国第2海兵師団ノーマンハッチ少佐の複数撮影班の何れかの班に所属していたが、軍歴等は不明である。
- 撮影期日は、他の軍施設接収状況からみて「1945年10月～11月頃」と想定される。
- オキュパイドジャパン期での「隈庄飛行場での初めての接収写真」の確認である。
- 本スライドは軍務中の撮影ではあるが、オフィシャルな米国国立公文書館(NARA)等の所蔵ではなく、撮影者個人が所蔵するカラースライド群である。今後、同様の資料がインターネット上で収集されたり、大学図書館等でのネット公開により、さらに発見・確認される可能性は高い。



写真19 隈庄飛行場接収時の様子。背景は雁回山  
写真20 焼却処分され炎上する九九式高等練習機と飛龍  
写真21 飛龍主翼上の隈庄町警防団員第二分団員  
衣川太一氏所蔵・くまもと南部広域病院所蔵

## (3) 陸軍通信筒と恩師への手紙

- 陸軍通信筒とは、多くは戦地において、敵情を偵察するなどして内容を前線部隊に知らせる等のために、通信文書を入れて飛行機上などから地上に投下される円筒物である。
- 隈庄通信筒 規格：全長21cm × 胴部径5cm × 蓋径5.5cm。重量：89g。色調：紺色  
材質：厚紙に紺色防水紙を貼付け 構造：正円筒に円筒蓋で閉封。蓋部には紐を通し、簡易な封としている。底面は表面防水紙が剥げ、一部はへこみ・破損している。経年使用が伺える。附帯赤リボン 全長65cm × 幅6.0cm、材質は木綿生地
- 筒表面には符合が貼られ文面には、取得者は学校届けの願い文が記載される。活字タイプで「此ノ通信筒拾得□ハ直□□□学校ニ届出相成度」の文言である。
- 現存する「手紙」は1枚のみ 陸軍用紙ではなく、一般便せんに一枚。万年筆書き  
「先生 御元気ですか 今日私は鹿児島へゆく途中一寸故郷の上へとんで参りました。  
空から始(ママ)めて見る故郷は実に美しいです。特に隈庄校はすばらしいものです。  
隈庄校の皆様によろしく。 伊津野重雄 高木正明様」
- 隈庄通信筒及び手紙は、投下のため事前に準備されたものである。隈庄町上空の飛行に際し、恩師や隈庄校等へのメッセージ・思いを綴ったものである。
- 現状では「所属する部隊が、上海まで渡洋するために、鹿児島まで移動する中で、事前に準備した通信筒と手紙（恩師・未発見ではあるが家族宛も有りか）を用意して、上空の部隊機より隈庄校グラウンドに投下したもの」と想定される。
- 九州内での通信筒遺存事例は、隈庄事例のみである。

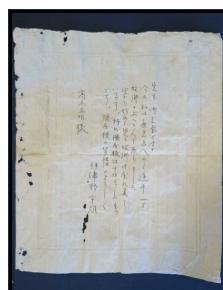


写真22 陸軍通信筒全体  
写真23 通信筒の開封状態  
写真24 恩師への手紙 高木正嗣氏所蔵  
写真25 隈庄尋常小学校全景 撮影は昭和初期か  
岩村匡氏提供

## 6 まとめ 「平和のバトン 未来へ」

今年は「戦後80年」であり「昭和100年」。歴史へ移行する分かれ目

- “世界のミフネ” 熊本での足跡
- 熊本地震での戦争遺跡の被災と復興
- ウクライナ戦争、ガザ戦闘と重なる「太平洋戦争」の姿
- 史実に込められた「歴史の重み」、「昭和の歴史」を教訓に!
- 一人ひとりが戦争遺跡・遺産と向き合い「語り手」「継承者」として語り継ぐ
  - ① 戦争遺跡の調査、保存、継承・活用
  - ② 戦争遺跡・遺産は、貴重な歴史資料として「国民共有の財産 “文化財”」
  - ③ 庶民の戦時資料の調査と継承は「地域協働の平和学」
- 地域の特性を基にした「平和の希求を!」
- 平和継承のための「戦争実相理解」と「平和の感性」を!
- 私たちひとり一人の、自分ごとの「新たな平和運動・活動」を!

[ メモ ]



写真23 三船敏郎演劇写真②の拡大

飛行場の演劇舞台上での写真で、左から三人目の眼帯を付けた椅子に座る眼帯姿の軍人が三船

写真24 三船敏郎演劇写真③の拡大

飛行場演劇の出演者集合で、左から二人目の軍人姿でサーベルを持つ人物が三船

※五十嵐俊輔氏所蔵基写真からトリミング

